

千代姫、九州小倉城主 細川忠利に輿入れの記事（二代將軍 徳川秀忠の養女としての輿入れ）
※千代姫は、飯田城主 小笠原秀政・福姫夫妻の次女。夫 細川忠利はその後、熊本城に移封となり
熊本藩細川家初代藩主となる。千代姫は熊本藩細川家の初代藩主の正室となったのである。

『小笠原秀政年譜』（信濃史料叢書）より

十四年己酉（慶長十四年、一六〇九年）

公（秀政公）四十一歳

二月、秀忠公千代姫十三歳ヲ養女ニナサレ、飯田ヨリ江戸ノ御城へ掣（ひき）取
セ給フ、

四月廿四日、千代姫君細川内記忠利公ノ許ニ御輿入テ御婚礼相整フ、細川忠利
公ハ豊前国ノ太守細川越中守忠興公ノ御嫡ニテ、同國中津ニ在城ニ付、江戸ヨ
リ行程二百七十里ニ及フ長途ナルカ故、三月中旬千代姫君江戸発駕シ給フ、秀
忠公ヨリ土井大炊頭利勝ヲ始メ、鶴殿兵庫助・伊丹喜之助ヲ御指副ナサル、其
外御旗本ヨリ数輩ノ御供タリ、家康公上意ニテ千代姫君駿府ノ御城ニ寄給フ処
ニ、段々御懇意ノ御事ニテ汝カ母存命ニテ祝言ヲ見ルニ於テハ如何程カ喜悦セ
シムヘシトノ上意アリ、中五日御抑留ニテ御馳走ナサル、道中ハ江戸品川口ヨ
リ城州伏見迄、両方ニ行馬ヲ結ヒ所々ノ川ニハ船橋ヲ懸、御止宿ニハ其所ノ城
中ニ御坐ヲ構ヘ、城主麻上下著用シテ当所ノ宿外レニ御迎ニ出ラレ、御輿ノ先
ヘ立テ案内シ給フ、伏見ニテハ松平参河守忠直卿ノ宅ヘ御止宿ナリ、豊前国ヨ
リ細川家ノ長臣長岡佐渡御迎ニ来ル、御川舟ハ豊臣秀頼ヨリノ御馳走ニテ、此
以前太閤秀吉公ノ召舟ナリシ鳳凰丸ナリ、其舟ニ千代姫君召給フ時、土井大炊
頭御輿ノ前ニ手ヲ添ラル、其後ハ鶴殿兵庫是ヲ昇テ、長岡佐渡ニ渡サル、総テ
其次第嚴重ナリ、秀頼卿猶更家臣ニ命シ、江口ノ四方ニ行馬ヲ結ヒ、其ノ中ニ
幕ヲ打、色々ノ御饗応アリ、夫ヨリ又川舟ニテ直ニ大坂ノ川口ヘ御出、豊前国
ヨリノ迎船ニ召ル、兵庫助・喜之助兩人共ニ中津ノ城迄御供也、四月廿二日豊
後国竹田津ニ御著船、此所モ細川家ノ領内故、仮ノ御殿有二付、是ニ上リ給ヒ、
細川忠利公御迎ヒニ出給ヒ、同月廿四日中津ノ城ニ於テ御婚礼相整フ、豊後国
日田郡田ノ内ニテ三千石、千代姫君化粧田ヲ拝領シ給フ、

《口語訳》

慶長十四年（一六〇九年）己酉（つちのととり）

小笠原秀政公、この年四十一歳

二月、二代將軍徳川秀忠公は、千代姫を養女にして、飯田城から江戸城へひきとらせました。

四月二十四日、千代姫君は細川内記忠利に嫁ぐことになり、婚礼が整いました。

細川忠利公は、豊前国の大名（国持大名）である細川越中守忠興公の嫡男で豊前國中津城に在城しており、江戸から中津までの行程は二百七十里に及ぶ長旅になります。三月中旬千代姫君は江戸を出発なされました。養父徳川秀忠からは土井大炊頭（おおいのかみ）利勝を（千代姫のお供の）大将に任じ、その他、鶴殿兵庫助、伊丹喜之助を副将に任じました。その他旗本たちも数名お供につきました。徳川家康公の御命令により千代姫君を（家康のいる）駿府城に呼び寄せたところ、あれこれ家康は千代姫に丁寧に対応し、「あなた（千代姫）の母（福姫）が存命で姫の祝言を見たならば、どれほど喜んだであろうか」との家康のお言葉がありました。中五日千代姫を駿府に留め置き歓待しました。

道中では、江戸品川から山城国（京都）伏見まで、両側に馬を仕立て、ところどころの川には舟橋（舟を組んで橋にする）を掛け、御宿所としてその場所の御城内に御座を設け、その城主は麻袴（武家の正装）を着用してその場所の宿場のはずれまで御迎えに出られ、（千代姫）の御輿の前に立って案内をしました。京都伏見では、松平三河守忠直卿の屋敷へ宿泊されました。伏見へは、豊前国から細川家の重臣である長岡佐渡が千代姫の迎えに上がりました。（伏見から大阪までの川筋を下る）川舟は、大阪城の豊臣秀頼からの御取り成して、以前太閤秀吉公の召し舟であった鳳凰丸がしたてられました。その舟に千代姫をお乗せするときは、土井大炊頭利勝が千代姫の御輿の前に手を添えて介添えをされました。

その後は鶴殿兵庫が（細川家家臣の）長岡佐渡に千代姫をお渡ししました。全てその様子は嚴重でありました。豊臣秀頼は家臣に命じ、江口（淀川の河港）の四方に馬を仕立て、其の中に幕を張り様々な饗応を行いました。そこからま

た川舟にて直に大坂の川口へ出て、豊前国からの迎船に乗船されました。鶉殿兵庫助と伊丹喜之助の両名は豊前國中津城までお供をされました。四月二十二日に豊後国竹田津に御着船し、この場所も細川家の領内であるため、仮の御殿がありここに千代姫は上がられました。夫となる細川忠利公は迎えに出られ、同月二十四日、中津城において婚礼となりました。豊後国日田郡田ノ内において三千石を千代姫君の化粧田として（細川家から）拝領しました。

資料作成 佐々木（飯田市商業観光課）